



Data 2023-77

監督・脚本: 乔思雪 (チャオ・スーシュエ)

出演: 巴德瑪 (バドマ) / 伊德尔 (イデル) / 蘇日雅 (スー・リーヤ) / 娜荷芽 (ナヒヤ)

👁️👁️ みどころ

邦題はわかりやすいが、それだけでは何の映画かわからない。それに対して、原題の『脐带』(＝へその緒)はインパクトのある言葉。認知症が進み、徘徊の危険が深まる母親を、ロープで自分の身体に結びつける息子の姿を見ていると、なるほど、なるほど・・・。

本作前半では、潔い主人公の選択ぶりに注目！後半からは、内モンゴルの大草原をサイドカーに母親を乗せて駆け抜けるロードムービーに注目！

母親が探す“思い出の木”はどこにあるの？そして、人間の幸せはどこに？そんな人生観と哲学を、内モンゴル出身の若手女性監督、乔思雪 (チャオ・スーシュエ) のデビュー作たる本作からしっかり考えたい。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■原題は？邦題の変更はなぜ？その賛否は？■□■

本作の原題は『Qi dai (脐带)』。これは、日本語で言う“へその緒”のことだ。しかし、2022年11月、第35回東京国際映画祭のアジアの未来部門に選出され、ワールドプレミア上映された時の邦題は、原題をそのまま日本語訳した『へその緒』だった。そんな本作は、フランスに留学して映画を学んだ、1990年生まれの内モンゴル出身の才女、乔思雪 (チャオ・スーシュエ) 監督の長編デビュー作だ。日本中国友好協会が発行する『日本と中国』の紙面で「熱血看護士坂和章平 中国映画を語る」の欄を毎月書いている私は、縁あってそんな本作の視聴リンクを入手することができた。本作は、6～8月に3回にわたって東京での試写会が予定されているが、そこでの公開にあたっては、邦題が『草原に抱かれて』に改められた。それは一体なぜ？

認知症が進む母親・娜仁左格 (ナランズグ) (巴德瑪/バドマ) を、都会で電子音楽をやっているミュージシャンの息子 (次男) 阿魯斯 (アルス) (伊德尔/イデル) が引き取り、

2人だけで母親が希望する故郷＝草原の中で過ごす本作は、『草原に抱かれて』の方がスマートかつスタンダード。しかし、認知症のため、ややもすれば野外を徘徊し行方不明になってしまう母親の身体を、息子は自らの身体とロープで繋ぎとめて生活していたから、そんな“実態”をきちんと見れば、邦題も原題と同じ『へその緒』で良かったのでは？さて、あなたの賛否は？

■□■内モンゴルに、こんなカッコ良いミュージシャンが！■□■

中国には漢民族の他に少数民族が合計55もあり、それぞれ自分たちの伝統を守りながら生活している。そのため、数は少ないながら、映画だってそれぞれの民族の映画がある。例えば、『羊飼いと風船』（19年）はチベット族の興味深い映画だった（『シネマ48』207頁）し、『大地と白い雲』（19年）は内モンゴル自治区の興味深い映画だった（『シネマ49』308頁）。モンゴル族と聞けば、私たち日本人はすぐに蒙古帝国やジンギスカン伝説に結びつき、屈強な騎馬民族を思い浮かべるが、『大地と白い雲』の主人公は内モンゴル版の“フーテンの寅さん”だった。つまり、本来なら、大草原の中で羊を飼い、ゲルで愛妻と仲良く暮らすべき主人公が、馬に代わってバイクや車が移動手段となり、草原の向こうでは急速な都市化が進む現代の内モンゴルに生きる若者（フーテンの寅さん？）として、羊の群れとトラックを交換し、いずこかに旅立っていく姿は、いかにも“時代の変化”を感じさせる興味深いものだった。

ところが、同じ内モンゴル自治区を舞台にした本作の冒頭は、演奏会の舞台上で電子音楽の演奏をするカッコ良いミュージシャン、アルスの現代的な姿なので、それに注目！今は経済的にも軍事的にもアメリカと肩を並べるほどになっている中国は、内モンゴル自治区だってアメリカのロックに負けちゃいけない！最新の電子音楽を演奏しているアルスの姿を見ると、そんな自負心も・・・？

■□■これは軟禁？虐待？ならば俺が・・・■□■

老人の介護問題、とりわけ認知症が進行する父親や母親の介護問題は、日本だけでなく先進国共通の問題。その問題は『ファーザー』（20年）（『シネマ49』26頁）でも、『すべてうまくいきますように』（21年）（『シネマ52』146頁）でも、さらに『波紋』（23年）でも取り上げられていたが、内モンゴル自治区でも同じ問題があるらしい。

公演を終えたアルスが携帯で話しているのは、兄夫婦と同居している母親ナランズグラしいが、どうも話がトンチンカン。「これは心配だ！」と思ってアルスが兄夫婦の家を訪れると、認知症が進行中の母親の介護には兄夫婦もかなり苦労しているらしい。今まさにその“現場”を見たアルスの目に、それは介護ではなく軟禁もしくは虐待とさえ思えたが、「それなら、お前がやってみろ！」と言われると・・・。「俺には仕事がある」さらに、「俺には大勢のファンがついている」と言いたいところだが、そんなことを兄夫婦に言えるはずはない。

ちなみに、私は2人兄弟の弟だから本作のアルスと同じ立場だが、幸いなことに両親は

夫婦2人でふるさとの松山にずっと住み、兄も私もふるさとを離れた仕事場にいた。そのため、帰郷もままならないまま、母親が死亡し、続いて父親も死亡したが、兄弟2人とも母親、父親を介護した経験はない。したがって、本作に見る兄夫婦の介護の苦労はわからないから、兄夫婦が母親に対して見せる介護姿勢を批判することはできないが、それはアルスも同じだ。アルスがそれに文句をつけて、「よりましな、より人道的な介護をし！」と主張するのであれば、認知症進行中の母親を自分が引き取るしかないが、さあ、アルスはどうするの？NHK大河ドラマ『どうする家康』では、毎回家康が選択を迫られているが、アルスに今、ミュージシャンを辞めて、認知症進行中の母親、ナランズグを引き取り介護するという選択肢はあるの・・・？さあ、どうするアルス・・・？

■□■内モンゴルを舞台とした名作の系譜をいかに継承？■□■

あなたはモンゴル（国）と内モンゴル（自治区）の違いを知ってる？日本の大相撲では白鵬や鶴竜、照ノ富士をはじめ、モンゴル出身で横綱まで上りつめた「強い力士」が有名だが、この“モンゴル”は、かつて“モンゴル人民共和国”と呼ばれ、今は“モンゴル国”と呼ばれている国のこと。それに対して、内モンゴルは中国の北部に位置し、中国政府の管理下に置かれている自治区のことだ。中国人はモンゴル自治区のことを内モンゴル、モンゴル国のことを外モンゴルと呼び、モンゴル国ではモンゴル国のことを北モンゴル、内モンゴル自治区のことを南モンゴルと呼んでいるようだ。かつて巨大な領土を誇ったジンギスカーン率いる“モンゴル帝国”は日本にも“蒙古襲来”という形で歴史上に2度も登場してきたが、現在日本で取り上げられるモンゴル国の話題は大相撲のことばかり。つい最近では、宮城野親方（元横綱白鵬）の弟子である落合改め伯桜鵬が、幕下付け出し初土俵からわずか3場所で新入幕したことが大きな話題となった。そんなモンゴル国に対して、内モンゴル自治区のことは、チベット自治区や新疆ウイグル自治区等と共に日本人にはほとんど知られていない。

そんな状況下、内モンゴル自治区を舞台として有名になった映画が、①『白い馬の季節』（05年）（『シネマ17』375頁）、②『トゥッヤの結婚』（06年）（『シネマ17』379頁）、そして③『大地と白い雲』（19年）だ。私は『大地と白い雲』の評論で、草原での羊飼いの生活に満足できず、都会に憧れてバイクを乗り回している主人公を念頭に「この男は内モンゴル版“フーテンの寅さん”？」の小見出しで書いたが、それは大地と白い雲、そして草原と羊がよく似合う内モンゴルでも急速に都会化が進み、ビルの林立する都会に憧れる若者が増えていることを示すものだった。しかし、本作の主人公アルスも都会に住み、電子音楽で人気を呼んでいるカッコ良いミュージシャンだから、もはやモンゴルの大草原より大都会のビルの方がよく似合う男のはずだ。そんな男が認知症の母親と2人きりで大草原の旅に出るとは！すごい決断！本作は中盤からそんなストーリーになっていくが、内モンゴルを舞台とした名作の系譜をいかに継承？

■□■母親の思い出の木はどこに?大草原をサイドカーで!■□■

大草原と聞けば、日本ではせいぜい北海道を思い浮かべるしかないが、内モンゴルのそれは規模が全然違うらしい。モンゴルの大草原を駆け抜けるには馬が最もふさわしいが、都会化が進む今の時代、アルスが愛する乗り物は『大地と白い雲』の主人公と同じく、馬ではなくバイクだ。もっとも、『大地と白い雲』の主人公が乗っていたのは普通のバイクだが、本作の主人公が乗るのは母親を乗せるもう一輪の車台を取り付けた、いわゆるサイドカー（側車付二輪車）だ。ヒトラー映画ではナチスの将校が側面の車台に座っているが、本作でそこに座るのは母親だから、そのコントラストは面白い。アルスが運転し母親が同乗する、そんなサイドカー姿は『大脱走』（63年）で見た、スティーブ・マックイーンのパイク姿ほどのカッコ良さはないが、内モンゴル特有の移動式テントであるゲルなど生活装備一式を乗せて以降展開していく、内モンゴル自治区での母親の“思い出の木”を探すロードムービーに注目!

川の近くに設営したゲルを抜け出した母親が見せるモンゴル式の踊りは、おばあちゃんながらなかなか魅力的。そのまま水の中に入っていくかのように(?)、アルスはしっかり2人の身体をロープで結んだから、これで母親の安全はキープ! 特別に何が面白いわけではないが、本作後半の主役はそんな2人の“臍帯”ぶりと、アルスが運転するサイドカーになるから、そんなロードムービーをタップリ味わいたい。

■□■アルスを助ける若い女性はひょっとして監督の分身?■□■

中国では近時、第8世代監督の抬頭が顕著だが、本作で監督デビューし、第35回東京国際映画祭アジアの未来部門に選出されワールドプレミア上映されたのは、1990年に内モンゴルに生まれ、フランスで映画を学んだ女性、乔思雪(チャオ・スーシュエ)。私は全然知らなかったが、母親役のパドマはプロの女優だが、アルス役のイデルは本物のミュージシャンで、モンゴル伝統の馬頭琴に現代的な要素を融合させて電子音楽をやっているらしい。

私が本作でこの2人以上に注目したのが、ロードムービーになった後にアルスの前に登場し、何かとアルスを手助けする若い女性、塔娜(タナ)(娜荷芽/ナヒヤ)。監督も美人だが、このナヒヤもかなり美人だから、私の目につくのは当然。しかし、ストーリー構成の上ではあくまで補助役に徹しているところは好ましい。そんな演出を考えると、このタナはひょっとしてチャオ・スーシュエ監督の分身かも……。母子のロードムービーの中に若い女性を加われば、恋愛問題が発生してきても不思議ではないが、さて本作は?そして何よりも、テーマである母子のサイドカーによる内モンゴルの大草原を駆け抜けるロードムービーの結末は?

認知症の怖さを強調すれば、怖さはいくらでも広がっていくが、他方、内モンゴルの大草原があれば……。本作を見れば、そんな新たな“人生観”が少しは芽生えるかも……。

2023(令和5)年7月5日記

『日本と中国』 2279 (2023年8月1日)

草原に抱かれて

9/23 (土) ~
新宿 K's cinema にて
ロードショー



監督・脚本：チャオ・スー

プロデューサー：リウ・フ

イ・フー・ジン

撮影：ツァオ・ユー

編集：チャン・イーフアン

美術：ジャオ・スーラン

音響：フー・カン

音楽：ウルクナ

(Chahar

Tugchi)、イデル

キャスト：パドマ、イデル

2022年中国/モ

ンゴル語/96分

原題：Qi dai 脐带

配給：パンドラ



熱血弁護士

坂和章平

中国映画を語る (77)

映画を新しいソフト大をはじめ映画に詳しくなると多岐(公
社 早稲田大学、NPO法人国際日本経済連携



(ざわわ・しちくい)

1944年生まれ東京都生まれ、大阪府立大学法学部。都立
関係に在籍する期間に多く手
がけ、日本都市計画学会、石
川真一、同様に日本弁護士会
「職業倫理賞」を受賞。歴史的
中国最大館(2007年)で
「2020オスカー」授賞式

脐帯(へその緒)は赤子
誕生時の生命線。ならば認知
症を徘徊を繰り返す母親を俺
の体に縛り縛り縛れば一心
団体を安心安全!「ラアアザ
ー」(20年)では、認知症の
父親が介護に励む娘に「お前
は誰だ!」と言いつづけていた
が、天空に青い空を白い雲、
地上に大草原が広がり、メル
と羊の群れが点在する内蒙
ゴルではそんな介護も可能
だ。しかし邦題は?

二人兄弟の弟アルスは電子
音楽を壊る人気者。認知症が
進む母の介護は兄夫婦任せ
だったが、その美態は半軟
禁? 毎毎の徘徊防止にはそ
れもやむなしたが、こりゃ人
権侵害! しかし「お前が面
倒を食う」と言われると弟の
決断は? NHK大河ドラマ
では徳川家康の毎回の苦境の
選択が見モノだが、弟は音楽
を諦めて母を引取り、広大
な草原を二人で旅する姿を選
択。それを助ける女性との出
会いは幸運だが、彼女はずう
ズに留守して映画を享び

「脐帯」(へその緒)の邦題が、なぜ「草原に抱かれて」に? — 一内モンゴルでは今なお、母親の介護にも大草原がお似合い!

本作で監督デビューした若き
才女・乔思雲の分身? 内蒙
ゴルでは季節ごとのメル
(天幕)移動をはじめ自然と
の闘いが不可欠。そのため
母は天地に感謝を捧げる祈り
の作法にも通じていたが、都
会に住む我は全く無知だが
ら、体を縛り結んだ二人の旅
が当初難航したのは当然だ。
しかし、故郷にある思い出
の木に近づくにつれて母子
の心は一つに。人間とは寿命
があり、いつかは死ぬものだ
が、介護(「軟禁」)下での
死亡と大草原に抱かれた中で
の自然死は大違いだ。

モンゴル国では、場所を新
入籍を異とした場合改めて自
鵬の話題で持ち切りだが、内
モンゴル自治区では安楽大草
原がお似合い。日本では絶対
に見られない風景を心に刻み
ながら、山の郵便配達(99
年)や「初春のまじ道」(99年)
を彷彿させる「日本人の心の
故郷」を、母親の介護という
難テーマの中でしっかり考え
たい。